原 信一郎

発見の発明

『スティーブ・ジョブズ（上・下）』
ウォルター・アイザックソン著／講談社

星型刻みのビス。見事なカーブで切り出された無垢な板を思わせるが、わずかに金色がかった艶消しの金属を、滑らかな手触りのガラスではさんでいる。人間の文法なら逆に金属がガラスを保護するはず。もしかして地球外来？

僕はiPhoneに保護フィルムは貼らない。表面に使われるガラスは選びぬかれた素材で、弱く傷つき易いフィルムはその美点を覆ってしまうことになる。ケースも付けない。１ミリ薄くするのにどれだけのコストがかかっているだろう。

本書は、ジョブズの生前から本人の希望で書き進められ、彼の死後すぐに出版された伝記である。彼は原稿を読んでおらず内容に一切注文を付けなかったそうだ。アップルファンには既知の話が多いらしいが、僕には興味深い話ばかりだ。

ジョブズは「世界を変えた人」と言われる。ちょっと大げさだ。確かにマックは素敵だしピクサーのアニメはどれも面白いが、それで世界が変わるわけない、と思っていた。しかし、改めて僕自身の生活の中で彼から影響を受けたモノの数の多さに驚く。そして、製品を手にしてなんとなく感じる、美しさ、心地よさ、ワクワク感は、実は彼が非常に強い、強すぎるほど強い意図をもって、まさにそのようにデザインしたからそうなったのだ。

この本を楽しく読むにはコツがある。ジョブズは人として問題大ありなのだ。例えば、自分の会社では、自分の思う通りに動かない部下を、汚い言葉でこき下ろして首にしたり、人のアイデアをつまらんと切り捨てておきながら、数日後には自分のアイデアとしてしまう。自分を、自己模倣をせず常に変革を行うアーティストと規定していて、普通の人間はアホと切り捨てる。そして親しい人にさえ、「共感欠損症候群」とか「自己愛性人格障害」とか言われるほど時として冷酷になる。数々の彼の不徳のエピソードごとに被害に会った人に同情するとしんどい。面白すぎる作り話と思うか、それはそれとして、と受け流すことにしよう。それに、自分がその手の人物に遭遇したとしても、大抵「ジョブズに比べれば十倍マシ」と慰めることができるようになる、という効用もある。

そんなキャラクターにもかかわらず、彼への賞賛の声は、彼の死後も絶えることはない。彼の作ったものは、パソコン、映画プロダクション、iPod、iPhone、iPod touch、iPad、iTunesストア、appストア、アップルストア、iCloudなど。ど

れ一つとっても誰にも真似のできない仕事である。例えば、「パソコンを作る」とは、単に製品の制作ではなく、そういうものの存在や概念自体を人々に知らしめることである。彼の有名な言葉に、人々が何を欲しているかはそれを見せてあげるまではわからない、というのがある。人の欲求の定義さえしてしまうのだ。

他にも沢山の言葉を残しているが、気に入ったのは…大学に入学する時、一緒に行きたがった親を突き放してさよならも言わずに家を出る、その時を回想しての言葉だ。「親がいると知られたくなかった。無賃乗車で放浪する孤児がたまたまそこに来たというイメージにしたかったんだ。ふるさともなく、天涯孤独な孤児が。」

ジョブズは、美的なセンスとそれを追い求め続ける力、アイデアを発想する能力、それを実現するために世の中を動かす力、全てにおいて卓越していて、自分とは比べようがないが、好みの点では意外と共感できる部分も多かった。例えば、デザインはバウハウス系（彼の場合、製品の形をシンプルにするために人殺しさえしそうなほど苛烈に行動するのだが)、音楽はディランやビートルズ、ジョーン・バエズ（彼はバエズを恋人にしちゃうのだが)、CDは自分の好きな曲だけ選んで聞く（彼はiTunesストアを立ち上げて、音楽業界を新しいステージに突入させてしまうのだが)。

エジソンが電球を発明したような古典的な意味での発明ではないが、私たちは、スティーブ・ジョブズを通して、インターフェースを発見し、デザインを発見し、コンピューターを発見し、商品というものを発見した。今となっては発見する前の自分を思い出せないような形で。

翻訳は良い。しかし、原書の電子版は、米Amazonで10ドル足らずだった。全文検索や英英の辞書がついている上、パソコンやモバイル系のデバイスで、クラウドにあるしおりを共有して読める。

執筆者紹介

原　信一郎

教育開発系准教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』　著者名　翻訳者名　出版社または文庫・シリーズ名　出版年　税込価格

『スティーブ・ジョブズ　１・２』ウォルター・アイザックソン著　井口耕二訳
講談社　2011年　各1,995円

ブックガイド目次へ